2021 年度（第 36 回）タカラ・ハーモニストファンド活動助成報告

カワノリの生育条件を調べ、消えゆく記憶を記録する活動

岐阜県山県市集落支援員 山口晋一　　岐阜県

１．はじめに

今回の活動では、①カワノリの生育に影響を与える要因を調査し、②カワノリの記憶を記録することで、カワノリを守り、清流によりそう人々の暮らしを伝えていくことを目指しました。本報告書では、助成を受けておこなった以下の３つの調査活動について、結果を報告します。

A：カワノリの生育条件を検証するため、日照状況と生育状況の関係を観察する。

B：カワノリに関する人々の記憶を記録するため、聞き取り調査をおこなう。

C：調査結果を地元住民の方々と共有するため、報告会（談話会）を実施する。

２．カワノリの生育条件を検証するため、日照状況と生育状況の関係を観察する

これまでの研究によれば、カワノリの生育に影響をあたえる要因としては

①水流（比較的急流でないと、ほかの苔などが台頭してしまう）

②水温（年間を通して水温が低くなければならない）

③水質（汚染されておらず、石灰質を含んでいる箇所で生育しやすい）

④水深（深すぎると生育しない）

⑤日照量（日照量の減少がカワノリの減少につながっている）

などがあげられます。私は、円原川でカワノリが群生するエリアを観察するなかで、隣接する岩でもカワノリが生育する岩としない岩があることを疑問に思いました。水流、水温、水質、水深がほとんど変わらないはずの条件下で、カワノリの生育に違いが出るということは、河畔林による日照の違いが影響しているのではないかと考えました。

そこで、カワノリの最盛期である８月に、円原川のカワノリ群生エリアに定点カメラを設置し、タイムラプス機能でカワノリを撮影しました。

撮影ポイントとしては、カワノリの群生地が複数ある円原集落の橋付近を選びました。橋桁にカメラを設置することで、川の真ん中から川全体を撮影することができ、また、南向きで日照の動きがよく観察できるためです。

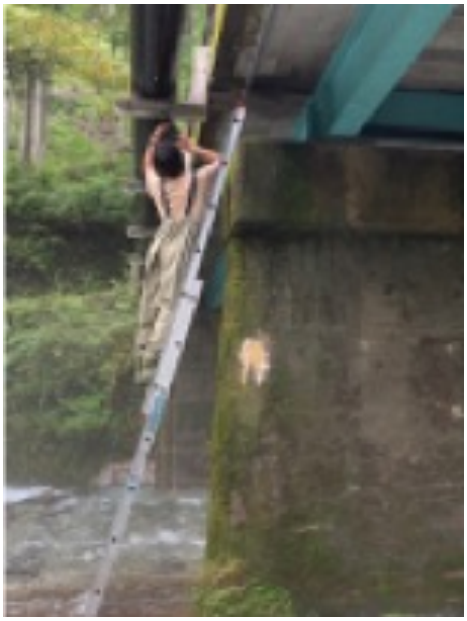


図１　カメラ設置の様子

カワノリが生育している箇所とタイムラプスの撮

影データを比較していきましょう。カワノリがよくついている２つのスポットに着目して、１日の日照の様子を確認すると、以下のような状況でした。

■右下（橋の下）で特に日が当たっている時間帯

・朝 8 時 34 分頃から 9 時半頃

・14 時 11 分頃から約 30 分

■真ん中（奥の岩）で特に日が当たっている時間帯

・13 時 21 分頃から 14 時 3 分頃

・15 時頃から約 15 分

図２　2021 年 8 月 29 日 8 時 34 分

図３　2021 年 8 月 29 日 9 時 33 分

この結果から、カワノリの生育箇所は、1日中日が当たっている場所ではないことがわかりました。日照量は、河畔林が伸びてしまって川が暗くなったことがカワノリの生育を阻んでいると考えていましたが、実際には、カワノリ群生スポットの日照は意外に短いようです。むしろ日が当たり続けるのはよくないのかもしれません。

なお、岐阜水産研究所の岸大弼先生による調査では、日照量とカワノリの繁茂ポイントを比較すると、1日の日照量が約56パーセントの地点がカワノリの日射に最適であることが明らかにされています。(岸 大弼・下本英津子・山口晋一 2022「岐阜県の円原川における

図4　2021年8月29日13時21分

図5　2021年8月29日14時11分

カワノリの分布および照度の現状」『水産技術』15 印刷中）

とはいえ、タイムラプスの映像を見ていると、カワノリ群生地のスポット以外の場所でも同じような日照量となっているように感じます。カワノリの生育には、やはり日照量以外の条件も関わっていると考えられます。

たとえば、映像からは、カワノリの群生地は、水がメインで流れている川の本流（本筋）から外れたところにつきやすいことに気づかされました。日照量と水の当たり方が、カワノリの生育には重要なのかもしれません。

３．カワノリに関する人々の記憶を記録するため、聞き取り調査をおこなう。

かつては村の特産品として、皇室や博覧会に献上されたというカワノリですが、美山町史には「大東亜戦争後、増殖場付近の山に、ドロマイト鉱が産出され、その汚水が円原川に流れ込むようになると、川苔の生育は後をたたれた」[美山町史 1975：728] と記載されています。現在では、ちらほらとカワノリを確認することができますが、円原川のカワノリは、近代から現代にかけて、大きく変化してきたようです。

■かつて特産品だったカワノリは、なぜ廃れていったのでしょうか？

■北山地区の住人にとって、カワノリとはどのようなものだったのでしょうか？

この２点を確かめるため、北山地区でカワノリについての聞き取り調査をおこないました。この聞き取り調査によって、①高齢化が進む北山地区におけるカワノリにまつわる記憶を記録することができる、②カワノリの保護と活用に活かせるデータを得ることができる、と考えました。

調査は、2021 年 10 月から 2022 年 4 月にかけて実施しました。調査方法は、質問紙を利用した対面式の半構造インタビューを用いました。なお、この聞き取り調査は、日本福祉大学の下本先生の協力のもとにおこないました。なお、対面式の調査のため、コロナの蔓延防止措置がとられている間は調査を避け、感染防止を徹底するように努めました。

調査対象としたのは、仲越、円原、伊往戸、神崎、日原、片狩と北山地区の全世帯です。現在は空き家になっている家も多いほか、普段は都市部で生活し、時おり帰ってくるというスタイルの家も多くあります。また、高齢のためインタビューに答えるのが難しいケースもありました。訪問してインタビューを実施することができた回答率は、97 世帯中 58

図６ 調査中の様子

世帯と、全体の約 59 パーセントとなりました。

調査に協力してくださった方の年代は、60 代から 90 代が中心となっています。なかでも 70 代 80 代が多く、高齢化が進んでいる地区の実情を見ることができますが、同時に、古い時代の話が聞けたことを示しています。

調査の質問項目は、おもに 6 項目に分類されます。①カワノリ分布域および衰退と再生の時期について、②カワノリ利用の経済について、③カワノリ食文化について、④カワノリのルールについて、⑤川と日常生活の密着度について、⑥昔の川の写真について、です。ただし、回答者の状況や返答内容に応じて、表現や順序、内容はその都度変えました。

1. カワノリ分布域／衰退と再生	**2. カワノリ経済**
カワノリはどのあたりにありましたか？	カワノリは誰がどんな時にとりますか？
カワノリが衰退したのはいつ頃ですか？	とったカワノリはどうしますか？
3. カワノリ食文化	**4. カワノリのルール**
採取、加工、保存方法を教えてください	とっていい場所といけない場所はありましたか？
どのように調理して食べましたか？	許可は必要でしたか？
特別な日の食べ物でしたか？	カワノリを増やす工夫はありましたか？
5. 川との密着度	**6. 昔の川の写真はありますか？**
カワノリ以外に川で何をとりましたか？	
川の水は生活に使っていましたか？	

図 7　調査項目

字名	世帯数	実施件数
仲越	ー	1
円原	8	5
伊往戸	8	4
神崎	34	24
日原	15	7
片狩	32	17
合計	97	58

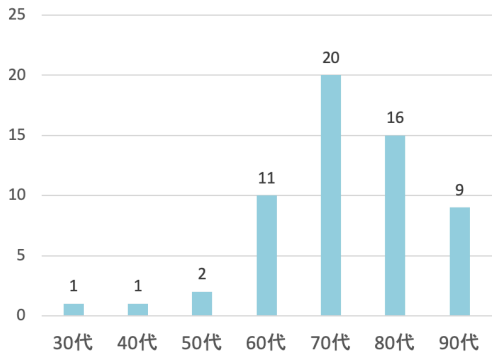
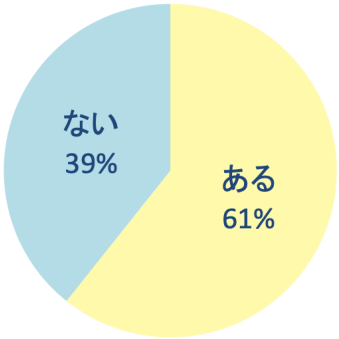


図 8　調査の実施件数と協力者の年代

それでは、調査の結果をまとめていきます。

まず、**カワノリについての人々の認知度**を確認しようと思い尋ねた、「カワノリを知っていますか？」という質問に対しては「知っている」が 100%でした。今回調査に協力してくれた 30 代から 90 代の方すべてが、何らかの形でカワノリのことを知っていたのです。

続いて、「カワノリをとったことがありますか？」という質問に対しては、およそ 6 割の人が「ある」と答え、「ない」の約 4 割を大幅に上回りました。そして、川の上流から下流にかけて、とったことがない人が増えていくということが顕著に見て取れました。カワノリは、より源流に近いエリアの方に身近だったと考えられます。

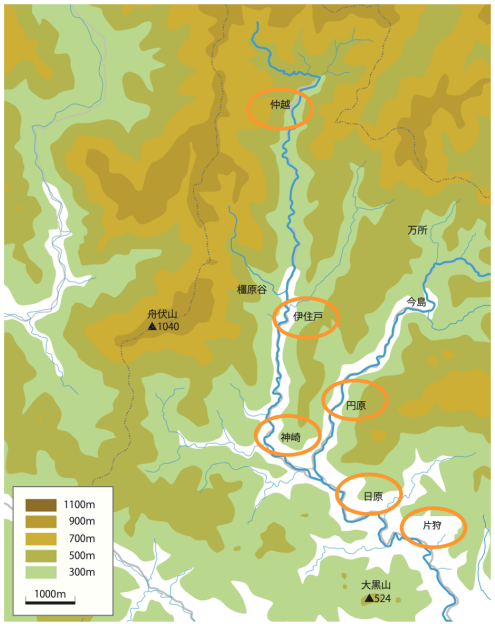


字名	とったことがある	とったことがない
仲越	1	0
円原	4	1
伊往戸	2	2
神崎	18	6
日原	8	7
片狩	7	7
合計	40	23

図９　カワノリをとったことがありますか？

また、**カワノリをとったことがある時期**については、
「子供の頃とっていた」26 件
「嫁いで来た頃、ついていってとった」5 件
「子供が小さい頃、川で遊ばせるついでにとった」2 件
などのように、昔話の思い出として語られる方が多かったです。もちろん、現在進行形でカワノリをとっている方もいますが、それはごく少数で、
「お盆で帰省するたび、夏の行事としてとる」1 件
「定年になってから、再びとるようになった」1 件
など、数件に止まりました。

カワノリが多く取れた場所については、想像以上に多種類のポイントがあげられました。



カワノリが特に多かったところ
■円原：吊り橋の下／土場／吹出口
■神崎：牛乳屋さんの下／堰堤／小谷合
■伊往戸：樫原谷／堰堤／滝の上
■片狩：堰堤／宗玄塚のあたり

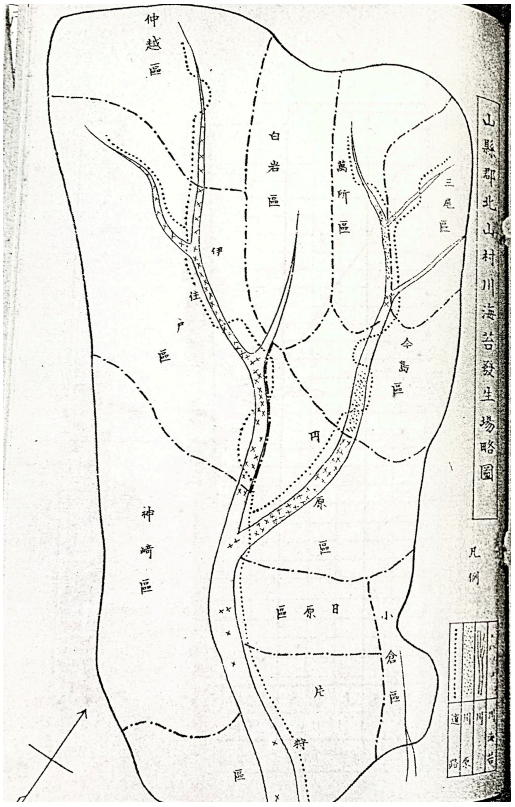
「岩という岩に、びっしりついていた」
「カワノリを踏まないと歩けなかった」
「カワノリがたくさんついている場所は、黒いくらいに見えた」

カワノリがとれたところ
■仲越「若い頃に仲越でとった」
■日原「家の前でとっているのを見た」
■追ヶ谷「岩についてるのを見つけた」
■夏坂「あいのもりの下でとった」

図 10　カワノリの分布域

現在でも最もカワノリが多く取れる円原はもちろんですが、神崎、伊往戸、片狩地区にも、「カワノリがびっしりついていた」というポイントがあったようです。そのほか、仲越や日原、追ケ谷、夏坂のあたりでもカワノリを見たという声もありました。

北山地区のカワノリ分布については、1927 年、1957 年に調査が行われていますが、今回の聞き取り調査では、過去の分布域のおよそ全域でカワノリの分布があったことが確認できました。ただし、円原川最奥の今島集落では、1927 年には分布があったようですが、それ以降は確認されていないことが明らかになりました。また、追ケ谷や夏坂は、今回の聞き取り調査で初めてカワノリの分布を知った箇所です。現在も確認できるかわかりませんが、実地調査をおこないたいと思っています。



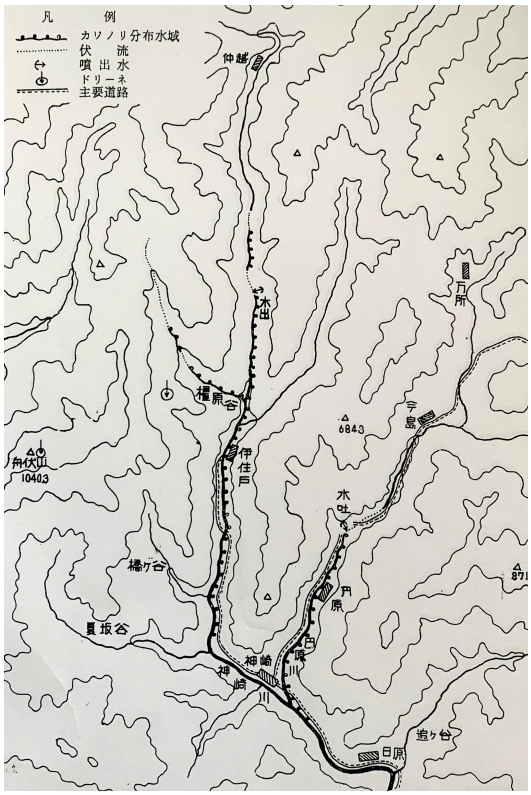
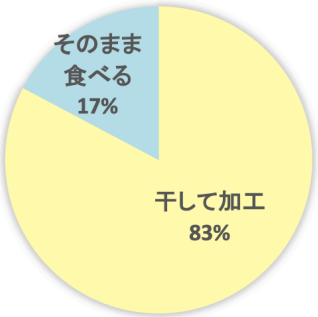


図 11　左：水産増殖試験場業務成績報告 1927、右：長良川の生物 1957

次に、「**とったカワノリを干して加工していましたか？**」という問いに対しては、干していたが 8 割をこえており、とったものは乾燥させた板ノリにすることが一般的であったことが分かります。これも、下流にいくほど「そのまま食べていた」という声が多かったのですが、これは板ノリにするほどの量が確保できていなかったことが原因ではないかと考えられます。また、板ノリにする際に、カワノリ専用の道具があった方が 10 件、竹ザル（しょうけ、とうみ）などを使用したという方が 17 件でした。

また、「**とったカワノリはどうしていましたか**？」という質問に対しては、「家で食べておしまい」と、圧倒的に家庭内消費が多かったのですが、「珍しいものだから人にあげていた」「欲しい人にあげた」など、人にあげるという声も確認できました。

そのほか、円原地区に限っては「婦人会で、年に 1～2 回とっていた。どこかに売ってい



字名	干しノリにした	そのまま食べる
仲越	0	1
円原	4	0
伊往戸	2	0
神崎	17	1
日原	1	0
片狩	3	4
合計	27	6

図 12 とったカワノリを干して加工していましたか？

たと思うが、どこに売っていたのかは知らない」という声があり、婦人会で組織的に採集していたことが分かります。珍しい例としては「カワノリ作りをやっている家にとったものを持っていくと、買ってくれた」と、現金に換金する例もあったことが分かりました。

カワノリの食べ方や味についての質問では、「ちょっと焼いて醤油をつけて食べる」という回答が圧倒的に多数でした。少数例として、「うどんのつゆに入れる」「佃煮にする」などの工夫もあるようです。また味については、「香ばしくておいしかった」という評価がある一方で、「買ってくるノリとはちょっと違う。そんなに食べたいとは思わんけど」「独特の味。子供の頃はおいしいとは思わなかった」と、味そのものが特別に好まれていたわけではないことが分かりました。

カワノリについてのローカルルールがあったか確認したところ、とっていい場所や許可などの必要性はなかったという回答で一致しました。ただし、なかには「よその部落のはとらん」というように、自分の住んでいるエリアで完結しようという配慮をしている人もいたようです。

「川でどんなことをしましたか？」という問いに対しては、「昔はお風呂も川水だったから、手桶で水を運んで、瓶に水をためてお勝手においておいた」と、かつては生活用水として川の水が使われていたという昔話を聞くことができました。また、「子供を連れて遊びに行った」のように、川は子供の遊び場であるという認識も、広く持たれていることが分かりました。そのほか、魚をとったという話も多くの方から聞くことができました。

そして、カワノリが減ってしまった原因を考えるために、**川がどう変わったのか**について聞くと、様々な意見が出されました。

「川鉄の油が流れて、とらなくなった」（円原）
「昔は円原川の水は飲み水だったけど、汚くなった」（神崎）
「ドロマイト工場ができて 5-6 年で、水に油が混じった」（神崎）
「今は水が少ないで、カワノリをあんまり見ない」（円原）
「水が涸れて岩にかからなくなった」（日原）
「川の水が減った。昔は家の前で泳げた」（伊往戸）
「護岸工事で重機が入って川が変わった。岩がなくなって流れがよくなったけど、カワノ

リもすぐ流れてしまう」（神崎）
「ダムが切れて、川が変わった。ずいぶん浅くなった」（神崎）
「昔はこれほど大水が出なかった」（神崎）
「川底が上がって、カワノリがつくような岩がもうない」（片狩）
「自然の木を切って植林したから」（仲越）
「川に木が多くなった」（円原）
「川ぐろの木はほとんどなかった。杉が成長してしまった」（片狩）
「カワノリは日光が大事。今は川が暗くなっている」（伊往戸）
「魚が全然いなくなった」（日原）

これらを見てみると、主に、水質汚染、水量の減少と川の凹凸の減少、日照の減少などがおきていると感じられていることが分かります。それらの影響を受けてでしょうか、かつてはたくさんいた魚が、今では全然いなくなっているという声も複数聞かれました。

最後に、聞き取り調査を通してわかった、北山地区のカワノリの歴史を年表にまとめてみました。聞き取り調査で明らかになったのは、昭和 10 年頃から現在にかけて、およそ 90 年間の歴史です。

昭和 10 年頃、北山地区では、地域の篤志家を中心としてカワノリを増産する活動がおこなわれていました。住民からカワノリを買い上げて板ノリ製品をつくるなどの試みだったようです。昭和 20 年代には、円原地区の婦人会で、組織的にカワノリを採取する取り組みがおこなわれていました。とったカワノリを販売していたのか献上していたのかわかりま

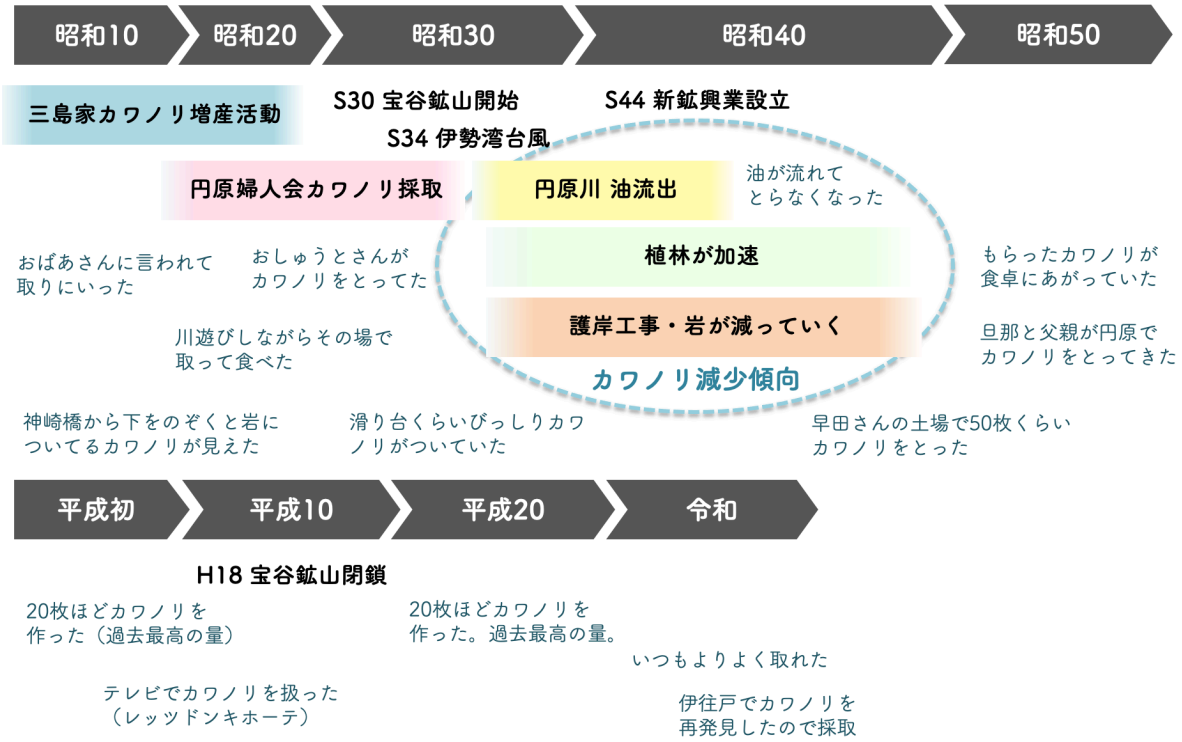


図 13　聞き取り調査からわかるカワノリの歴史

せんが、いずれにせよ、昭和 10-20 年代にかけて、北山地区ではカワノリが盛んにとられ、外に向けて販売（あるいは献上？）しようとされていたようです。

昭和 30 年代に入ると、円原川の上流に宝谷鉱山がつくられました。このドロマイト採石場で使用されていたディーゼル油は、時に流出して川に流れ出したようで、「魚が油臭くて食べれなかった」「カワノリをとらなくなった」との声がありました。その後、油の流出などは対処されておこならなくなったとのことですが、昭和 44 年に新鉱興行が設立されるなど、川の上流に採石場が立て続けにつくられたことは、河川の環境への影響をあたえた可能性があります。

また、昭和 34 年には伊勢湾台風がおこりました。北山地区でも、橋が落ちるなどの被害を受けて改修工事がおこなわれたそうです。この伊勢湾台風の被害もひとつの要因とのことですが、このころ日本では全国的に建築需要が高まり、木材の価格が高騰しました。それによって、かつて周囲の山々はほとんど畑だったという北山地区でも植林が加速し、川を囲む山々は杉林となりました。この昭和 30-40 年代は、河川の護岸工事などの改修がおこなわれて川の岩が減ったり、河畔林まで杉の植林がおこなわれるなど、北山地区の自然景観がかなり大きく変わったものと考えられます。そして、環境が変わることによって、カワノリも減少したものと思われます。

もっとも、それによってカワノリが完全に衰退したわけではありません。年代がさまざまな皆さんによるカワノリに関する思い出を並べてみると、昭和 40 年代以降も、途切れることなくカワノリの思い出は続いています。昭和 50 年代に、食卓にカワノリがあった話や、平成に入ってから過去最高の量を採取したなど、現在に至るまで、カワノリは消えることなく北山地区の人々の生活に存在していたのです。

以上のことをまとめると、次のようになります。

北山地区のカワノリは、もともと、地域の人みんなが知っている川の幸でした。おそらく、春の山に山菜を取りに行くような感覚で、人々はシーズンになるとカワノリに親しんでいたのでしょう。

江戸時代になると、カワノリを献上したという伝承が残っています。献上品にするためには、家庭内消費とは違って、形を整える必要があります。おそらくこの頃、板ノリに加工するための道具が作られたのではないでしょうか。北山地区でとれる珍しいもの＝特産品としての位置付けが生まれ、明治、大正、昭和の時代にかけて、博覧会に出品したり、献上したりされたのだと考えられます。昭和に入ると、北山地区に

カワノリは、北山の人みんなが知っている川の幸だった

江戸時代？

カワノリ専用の道具、増殖実験、特産品化の試みなど、、

「カワノリ文化」の芽生え

昭和30～

・川の変化（水量減少、水質汚染、魚の減少、カワノリの減少）
・生活の変化（水道の整備、子供の減少）
　→ 川に行く機会が減る
　→ カワノリを見る／とる機会が減る

「カワノリ文化」の衰退

■カワノリは減少したけれど、なくならずに生育している
■清流のカワノリを身近に感じる暮らしは、北山地域の強み

図 14　まとめ

は増殖場がつくられ、特産品としてさらに発展しようと試みられたことが伝えられています。こうして、個々の採集を超えて地域の「カワノリ文化」が芽生えようとしていたものと考えられます。

しかし、昭和 30 年代以降になると、川が変化し、そして人々の生活が変化していきます。河川の水量は減り、水質は汚染され、魚やカワノリが減っていきました。また、水道が整備されたことで川の水を生活に使う機会が減り、子供が減ることで、遊び場として川を活用する機会も減っていきます。こうしたことが、人々の「川離れ」をもたらし、カワノリを見る機会、カワノリをとる機会は減っていったと考えられます。すなわち、「カワノリ文化」の衰退です。

けれども、現在でもカワノリはなくならずに生育しています。単に、カワノリが川に生育しているというのではなく、カワノリの記憶やカワノリ作りを続ける人が残っている現在、カワノリ文化も衰退しつつ残っていると言えるのではないでしょうか。

４．調査結果を地元住民の方々と共有するため、報告会（談話会）を実施する

報告会は、2022 年 3 月 12 日、北山にある「古民家テレワークセンター神崎よってちょ」にて開催しました。事前に、カワノリ報告会を伝えるためのチラシを回覧板で配布し、住民への参加を呼びかけました。

当日は、北山地区の連合自治会長、北山地区への移住者である地域おこし協力隊員、円原川で古くからカワノリを取り続けてきた住民の方など、さまざまな立場の方に来訪いただきました。

図 16　カワノリ報告会の様子

■岸大弼（岐阜水産研究所）

「カワノリとはなんだろう？その歴史と利用」

岸先生は、文献調査をもとに、全国的なカワノリの分布や歴史、ならびに北山地区でのカワノリの利用について報告してくださいました。特に、北山地区で江戸時代以来のカワノリ献上の歴史があったことなど、地域の人も知らないような情報を示してくださったので、大変興味深い報告となっていました。

■下本英津子（カワノリ研究者）
「北山地域のカワノリの思い出　聞き取り調査から」
下本先生は、聞き取り調査の結果をまとめ、北山地区でのここ 90 年ほどのカワノリの歴史を紐解いてくださいました。文献では明らかにならない部分や、住民の慣習的な側面までもが明らかになったため、独自の調査データを得ることができました。

■山口晋一（集落支援員）
「今後の活動内容」
そして最後に、私から、これまで北山地区でカワノリについてどのような活動をおこなってきたかを報告し、さらに、これからどのような可能性をもっているかを報告しました。私の保護調査活動は、おもに円原地区でおこなっていたため、ほかの地区の方に活動内容を伝える良い機会となりました。
また、今後の活動の展望として、保護を続けつつも商品化して、北山地区以外の方々にも「山県市北山地区にカワノリあり」ということを伝えて行きたいと考えていることを報告しました。

いずれも非常にディープな報告内容でした。カワノリについて、これだけ詳細な話題が集まる報告会は、全国的にも珍しいと思われます。そして、会場にいらっしゃった方々は、皆さんがカワノリに興味のある方だったため、質疑応答も非常に盛んでした。参加者の人数が多くはなかったので、会場では車座のようになって報告を聞いていたのですが、報告が終わるたびに、誰ともなく自然と発言し、質問やコメントを共有するという、期待通りの運びとなりました。

■質問やコメントの内容
「カワノリが減ったことと、魚は関係しているのでしょうか？」
→「魚がいなくなったからカワノリが減るというような直接の因果関係はないと考えられますが、魚がいなくなるような環境の変化が、カワノリの減少にも影響を与えていると考えることができます」
「川の環境の変化が、魚やカワノリに影響を与えているというのは理解できますが、住人としては、生活を守る方が大事なので、川の整備自体を否定することはできないと思っています」
→「もちろんそれはわかります。川を自然状態で守ればいいというわけではありません。カワノリに関して言えば、コンクリートにも着生することが分かっていますので、人間の活動に合わせた形でも保護することは可能なのではないかと考えています。」
「カワノリを商品として見るよりは、川と地域とのつながりが大事で、そこを伝えられたらいいなと思いました」
「カワノリはとったことあったけど、こんなにすごいものだとは知らなかったです」
「自分たちも知らないような地域の歴史がわかるのは、ありがたいことです」
また、参加者のなかには、報告会の様子を SNS で発信してくれた方もいました。

■SNS の内容
「真の清流って、ただ川が綺麗なだけじゃなく、人々の暮らしと川が密接につながって、なおかつ川苔のような貴重なものが育つ環境なんだと思います。人々の生活の便利さをとるか、環境保全を取るかは切実な問題だけど、サステナブルが叫ばれる今の時代にこそ、この川苔の文化の復活は一つの軸になる気がしています。」K 氏

「皇室に献上されたことのあるカワノリだけど、地域の方にとっては、もっと身近で、川遊びで小腹がすいたときに採ってつまむ、みたいな懐かしい思い出とともにあるものっているのが素敵だと思った（中略）生態調査、聞き取り調査、守り増やすための調査、販路の開拓、それらの報告会、この全ての活動が地域の方やいろんな人にカワノリのことを思い出してもらったり、知ってもらったり、興味をすることにつながってるなって感じた。」S 氏

また、ご報告いただいた両先生にも、次のような感想をいただきました。
■岸先生
「拙い発表でお恥ずかしいかぎりですが、一助となったのであれば幸いです。今年は、未確認の地点でカワノリを探したいです。」

■下本先生
「報告会というと堅苦しくなりがちなのですが、昨日は、参加者みんながストーブを囲んで座り、報告を聞いては思い思いのことを話すという、なんとも温かい雰囲気になりました。それでいて、話した内容はとても濃くて、カワノリを通して川や森の変化、昔の暮らし、これからの理想の姿を考えるきっかけにもなった気がします。こんな機会をもてたことを、本当に嬉しく思っています。あらためて、ありがとうございました。」

５．今後の展望

カワノリは、神崎川・円原川の水の美しさを象徴する存在であり、カワノリにまつわる人々の思い出には、清流に暮らす人々の知恵や経験が含まれています。カワノリを保護し、その存在を広く知らせることは、河川環境の保全とともに、川と人との生活のあり方を再考するきっかけになると考えています。
今回の成果をもとに、今後は次のような活動に取り組んでいきたいと考えています。

■カワノリの保護・増殖活動
引き続き、カワノリを保護し、増殖するための活動を続けていきます。今回の調査で、カワノリには適度な日照と、適切な水の当たり方が必要だということが明らかになりました。そこで、カワノリの種取りや種苗液の塗布を、カワノリが生育しやすそうな場所にすることで、カワノリを安定的に増やすことができるのではないかと考えています。

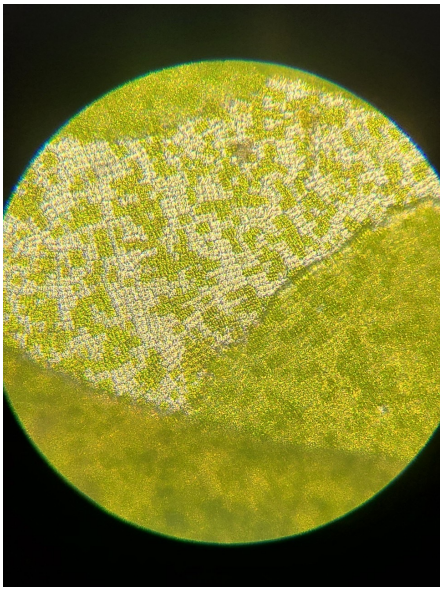


図 17　カワノリの増殖

また、明らかに日照が不足していると思われるポイントでは、河畔林を伐採することで、カワノリの生育に適した環境状態を作れるのではないかと思います。その場合は、河畔林の持ち主や伐採の依頼など、各種の調整が必要になりますので、時間をかけながらよりよい形を探っていく所存です。

■カワノリ商品化

かつて北山地区の特産品として知られていたカワノリを、ふたたび特産品とするために、カワノリの商品開発にも取り組みたいと考えています。もっとも、かつては 100 枚以上とれていたとされる北山地区のカワノリですが、現在は多くても 1 年に数十枚が限度です。

そのため、板ノリとしての販売には限界があります。そこで、板ノリとしてではなく、カワノリを使ったスイーツをつくって販売することで、少量のカワノリでも商品化ができるのではないかと考えています。

また、ふるさと納税の返礼品にカワノリを組み込むことで、特産品としてのカワノリをイメージづけ、県外の方にもカワノリを届ける仕組みを作りたいとも考えています。

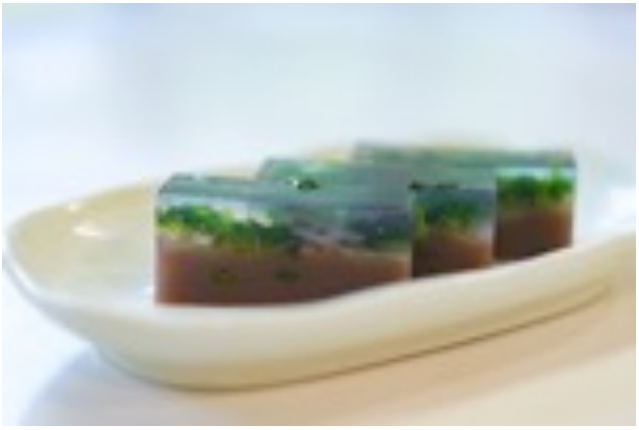


図 18　カワノリスイーツ（案）

■カワノリの周知

上記で商品化と書きましたが、報告会でも話題に上がっていたように、カワノリを産業の柱とするよりは、カワノリと北山地区の人々の関係性をもっと発信していきたいと考えています。商品化は、そのためのひとつの手段にすぎませ

ん。
カワノリという貴重な資源が北山地区の川にあって、人々がそれと親しんできたことを周知することで、北山地区という場所の良さや、自然とともにある生活を皆さんに知っていただけると思います。
そのために、将来的にはカワノリについてのリーフレットや冊子を作りたいと考えています。幸い、今回実施した聞き取り調査では、北山地区のカワノリについてこれまで知られていなかったような情報が集まりました。こうした情報をまとめて配布することで、地元のカワノリを知っていたけれど忘れていた世代、カワノリを知らない世代、また市外のカワノリを知らない人々にも、北山地区のカワノリを知っていただけるのではないでしょうか。

上記のような活動は、私個人の力では到底叶えることができません。調査段階の現時点では、行政から直接的な予算や支援を受けることが難しく、周りのサポートに支えられることで、活動を続けてくることができました。そうした状況のなかで、今回のタカラ・ハーモニストファンドの助成金は、私にとって非常にありがたく、背中を押してもらえるものでした。最後になりますが、今回、活動助成に採択していただいたことのお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。